道青陵

第１０８号
北海道教育大学
青　陵　会
（北海道教育大学岩見沢校同窓会）
会長　早　瀬　公　平
印刷　北海道社会福祉事業団福祉村
（TEL 0126-４５-２３００）

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

もくじ

○巻頭言……１　○総会報告……２　○令和３年役員……３　○研修部より……４
○先輩を訪ねて……５　○学生活動支援事業……５　○恩師と学生のこの頃……６
○新青陵会員の抱負……７　○支部便り……８

百年を越えて新たな同窓会づくりを

北海道教育大学青陵会　会長　早瀬　公平

全国各地でご活躍の会員の皆様、ご家族も含めていかがお過ごしでしょうか。

昨年に引き続き、新型コロナウィルスは、依然、猛威を振るい、日常の生活を狂わして多数の方々が犠牲に遭われています。日々、気持ちが休まる日はありません。

今年の総会もまた紙上総会となりました。全支部に総会議案をお送りし、熟議をいただいて、原案賛成の決議をいただきました。各支部会員の皆様のご理解とご協力に心から感謝を申し上げます。

役員改選も紙上提案という前例のない形で行われ、私も三期目を担うこととなりました。着手したばかりの同窓会改革の完遂に向けて、鋭意努力してまいりますので、何卒、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年来、会の運営はことごとく中止をやむなくされているようですが、実際には、事務局員の皆さんは、各々、部会を開き、各事業に向けた準備や作業を進めています。

分量で表すと、実際に開催する場合とほとんど変わらぬほどの仕事量です。総会の会場予約や開催の準備など、ほぼ完了していても中止を決断しなければならないという虚しさは今年度限りにしていただきたいものです。

大学の授業も「緊急事態宣言中」はリモートで行われていましたが、解除後は、少人数の講義やマンツーマンのレッスンなどは対面で行われるようです。現二年生は入学以来リモート授業が続いていて、もしや今年度末までこの状態が続くと、大学生活の半分が通信教育課程ということになりかねません。実は、この二年生の学生達は、開学百年目の節目に当たる方たちです。

本学は、一九二三（大正一二）年に実業補習学校教員養成所（当時は一年課程）として開校しました。以来百年を経て、二〇二三（令和五）年には記念すべき百回目の卒業生となり、それが、現二年生というわけです。

そのような節目となる時代を、本学で過ごしたという思い出が、自宅やアパートの自室の壁と向き合い、ひたすらパソコン画面に向かって問答を繰り返す日々であった、というのでは、皆さん、いかがでしょう。

私たちの青春時代にも暗い思い出や悲しいことなどもありましたが、自分一人では何もできないもどかしさやむなしさが感じられます。何とか、学生たちを励ましてあげたいものです。

私たち青陵会は、会員相互の親睦と資質の向上を目指した事業の展開と学生への支援を中心に活動を進めてまいりました。長年続いた国際交流基金を学生活動支援基金に替えて十一年が経過し、現役学生にも、青陵会の名前や存在が認識されてきました。

しかし、これからは新たな時代を迎え、新たな感覚で同窓会を再構築していく必要が求められています。「同窓会今後のあり方検討委員会」答申を真摯に受け止め、力強く同窓会改革を進めていかなければなりません。

その一つに小さな組織ではありますが大きな視野で会員相互の絆を深めていくことです。将来的に、本部事務局の縮小や各支部の状況により統合・合併を余儀なくされることなどが考えられます。既に、地元空知支部のご理解をいただき、事務局役員の兼務が進められています。

例えば、これまで教職員が中心なって行われた研修等が、支部単位では開催不可能な状況も見られます。

規模は縮小されつつも、全道・全国に目を向けて、教職研修等は合同で行うなどの工夫が必要です。また、親睦活動も、異業種交流のような姿に変わっていかなければなりません。

新型コロナ禍は、悪行ばかりではありません。ＷＥＢの活用という、長い間、足踏み状態であったデジタル文化の背中を押してくれました。全国に散らばる会員とつながるには、もはや、紙媒体のやり取りでは非合理的であり、担当者の苦労にも甚大なものがあります。この困難な状況から新しい方策を見出し、百年を越えて新たな同窓会づくりに、力強く再スタートしたいものと心から願っています。全国でご活躍の会員の皆様のご理解とご協力を切にお願いしたいと思います。

皆様方の健康とご多幸、そして各支部の益々のご発展・充実を心からお祈り申し上げます。

令和三年度　北海道教育大学青陵会総会報告

「同窓会創立百周年を見据えて」

北海道教育大学青陵会理事長　藤　田　祐　二

一　はじめに

今年度の役員改選で理事長を拝命しました藤田祐二と申します。小関理事長の後任として、与えられた役割を果たしてまいりたいと考えておりますので、各会員の皆様には一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、令和三年度総会については、五月十五日(土)に岩見沢市のホテルサンプラザで開催する予定としておりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、昨年度同様、集合形式の総会を中止することとし、各支部への議案の送付による提案、並びに各支部からの議決書の送付により議決を行い、総会議案は各支部の可決により承認されました。

この間、一般の会員の皆様からのご意見を伺う機会がなく、大変申し訳なく存じますが、このような状況ですので、何とぞご理解くださいますようお願い申し上げます。

二　令和二年度の反省

①　事務局の取組

ア　同窓会創立百周年に向けた準備（準備委員会、期別名簿の作成など）

イ　同窓会今後の在り方検討委員会答申の具体化

ウ　ホームページでの積極的な情報発信

②　総務部の取組

ア　退職された会員の意識の変容に向けた啓発

イ　大学卒業式・入学式に対する取組の強化

③　研修部の取組

ア　総会と研究大会の同時開催（コロナにより中止）

イ　研修誌「望岳final」の頒布

④　会員・組織部の取組

ア　会員名簿のデータによる集約（冊子は作成せず）

イ　同窓会創立百周年に向けた期別名簿の作成準備

ウ　組織実態調査の見直し

⑤　広報・情報発信部の取組

ア　会報「道青陵」一〇六号、一〇七号の発行

イ　ホームページの充実

⑥　大学連携部の取組

ア　学生活動支援事業の継続

イ　学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会加入促進

以上が令和二年度の主な取組です。

三　令和三年度の活動計画

①　事務局

ア　同窓会創立百周年に向けた準備（準備委員会の実施、実行委員会の立ち上げ、推進計画の策定など）

イ　同窓会今後の在り方検討委員会答申の具体化

ウ　ホームページでの積極的な情報発信

②　総務部

ア　退職された会員への会報の送付

イ　大学卒業式・入学式における祝文の発送、同窓会入会活動の強化

③　研修部

ア　総会と研究大会の同時開催（コロナにより中止）

イ　研修誌「望岳final」の継続頒布

ウ　専門的教育職員育成のための特別研修会の実施

④　会員・組織部

ア　同窓会創立百周年を見据えた期別同窓会名簿の作成

⑤　広報・情報発信部

ア　会報「道青陵」一〇八号、一〇九号の発行予定

イ　ホームページの充実

⑥　大学連携部

ア　学生活動支援事業の継続

イ　学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会加入促進

⑦　会計

ア　会費納入の働きかけ

イ　経費節減の推進

以上が令和三年度の活動計画です。

昨今、新型コロナウイルスの変異株が猛威を振るう中、その状況を見極め、感染拡大防止に努めながら、できるところから取組を進めてまいりたいと考えておりますので、引き続き、各会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げ、総会の報告とさせていただきます。

なお、令和五年に同窓会創立百周年を迎えるに当たり、百周年記念事業の実施に向けた準備を本格化させることとしており、今年度後半には、実行委員会を立ち上げ、具体的な準備作業に着手する予定です。また、百周年を契機として、各会員の皆様のご協力をいただき、期別同窓会名簿を整理することとしております。

個人情報の保護つきましては、昨年度制定しました「個人情報保護の適正な取扱いについて」により対応してまいりますので、期別同窓会名簿に必要な情報の提供について、ご理解・ご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

岩見沢校では、敷地内に「森の岩ギャラリー」を新設し、七月九日にオープン記念式典を実施しました。

ギャラリーは、駐車場近くの車庫の横にある浄化槽設備を改装し、ギャラリー内には美術作品などを展示できるほか、建物外側には階段が、屋上にはウッドデッキが設けられています。

記念式典では、蛇穴学長、松野市長をはじめ、五名の皆さんがテープカットを行いました。機会がありましたら是非一度、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

令和３年度　北海道教育大学青陵会　支部長・事務局長一覧

支部名	支部長	事務局長
札幌	白川典洋	小松靖一
石狩	安保幸司	吉田光岐
後志	渡邉均	佐々木淳
小樽	宮澤知	及川年彦
上川	倉本格克	石塚睦
宗谷	小島康秀	山本民
留萌	金山茂樹	豊崎東洋
檜山	草間留美子	草間留美子
渡島	浅野友善	浅野友善
空知	宮本千裕	高岸春二
胆振	真鍋忍	北野雄介
日高	品田和輝	玉手広昭
帯広・十勝	大熊孝史	上坂寛
釧路	志藤秀樹	志藤秀樹
根室	滝泰英	滝泰英
オホーツク	清水洋人	水野利幸
関東	岡山武	御法川慎司
高特大	山下秀樹	宮崎純也
指導主事	瀬越義範	山本泉美
社教主事	氏家浩之	川森功偉
公務員・民間	松浦靖高	佐藤直輝

令和３年度　北海道教育大学青陵会役員

名誉顧問
葛西明
笠井瑞昭
藤原光成
今井信義
大森啓司
我孫子章平

顧問
佐藤惠三
根津孝

参与
荒川巌
高島康範

会長
早瀬公平
東志昇
高木勇一

副会長
石塚信彦
綱渕秀幸
近田勝信
宮本千裕（空知）
猪狩秀一（札幌）
波津雅俊（石狩）
巻敏弘（一区）
本間正彦（二区）
浅野友善（三区）
真鍋忍（四区）
小田良秀（五区）
山下秀樹（高特大）
眞田眞（指導・社教）

理事長
藤田祐二（岩見沢小）

副理事長
井村信（岩・豊中）
島恵司（美・中央小）

会計
尾見秀樹（岩・美園小）
野村知史（岩・北真小）

総務部長
米倉卓司（沼田中）

副部長
曽根秀彰（岩・清園中）
小林広（岩・北村小）
箕田裕（月形小）

研修部長
小熊孝一（秩父別中）

副部長
石原学（芦・啓成中）
三浦新一郎（栗・継立小）
長崎卓也（砂・中央小）

会員組織部長
林和伸（浦臼小）

副部長
疋田博和（赤・赤間小）
江幡佳代（三笠小）
渡邉現（新十津川小）
杉島亜紀（栗・角田小）

広報情報部長
新保秀樹（栗・継立小）

副部長
林宏和（岩・豊中）
渋谷憲一（秩父別小）
一ノ瀬健太郎（岩・東小）
小野寺英樹（深川中）
沢泰宏（岩・第一小）

大学連携部長
野田泰史（岩・北村小）

副部長
堀文彦（由仁中）
三國均（岩・光陵中）
小林大助（岩・東小）
鈴木輝光（千歳第二小）

監査
谷本慎司（一区）
品田和輝（四区）
成田秀彦（空知）

研修内容活動の報告

北海道教育大学青陵会　研修部長　小熊孝一

今年度、研修部長に就任いたしました、小熊孝一と申します。昨年度まで副部長の任に当たっておりました。経験浅く、まだまだ若輩者ですが、どうぞ、よろしくお願いいたします。皆様方のご支援、ご協力により、研修部としての取組を進めて参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、今年度の研修ですが、昨年度から実施予定としておりました「会員研修会（Sセミナー）」につきましては、総会後実施予定でありましたが、皆様ご存じのとおり、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期とさせていただきました。昨年度中止となったご講演（演題「みんなで学ぶSDGs」・講師：水野雅弘氏（株式会社TREE 代表取締役））を、今年こそはとお願いしていた矢先、新型コロナ感染拡大が進み、会員の皆様のご意見も伺う中で、残念ながら実施を断念したところです。

今後の見込みとしましては、会員による懇親の場も用意できるようになる状況下においての開催としており、コロナ禍にある現時点では（七月二十八日現在）いつに実施とするか、目途はたっていない状況です。

この他にも、研修部としては、各支部の研修活動への講師派遣という形で、支援・協力させていただいております。既に七月、十勝・帯広支部の研修会に藤田理事長が赴き、支援させていただいております。これからもお声かけいただければ、派遣対応いたしますので、どうぞご連絡ください。

また、研修誌「望岳final」の頒布も行っております。今年はいくつかの支部から依頼があり、頒布させていただいております。残部数はわずかですがご希望がありましたら、ご連絡お願いいたします。

加えて研修部では、専門的教育職員（指導主事・社会教育主事）の育成も行っており、昨年度は指導主事任用希望者への「特別研修会」を実施しております。こちらは道青陵会指導主事会の協力の下、実施しております。昨年度は皆様のご支援、ご協力により、本会から一名採用されました。今年度も各支部の皆様からの情報提供もいただきながら、取組を進めて参りますので、よろしくお願いいたします。

○実施を見合わせた講演会（Sセミナー）の概要について

昨年度、実施できなかった講演会（Sセミナー）を、今年度も同じ内容で実施することとしていました。その開催概要を情報提供いたします。ただ、新型コロナウイルス感染症の国・道・空知管内の情勢を踏まえる必要があり、実施は未定となっています。

◇テーマ「みんなで学ぶSDGs」
◇講　師　株式会社TREE
代表取締役　水野　雅弘　様
◇講師プロフィール等

SDGs〈エスディージーズ〉は持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）のことで、十七のグローバル目標と一六九のターゲット（達成基準）からなる国連の開発目標です。株式会社TREE（本社：神奈川県鎌倉市、代表取締役：水野雅弘氏）は、二〇一五年九月の国連二〇三〇年SDGs採択後、二〇一六年十月からインターネット上の映像メディアプラットフォーム「SDGs・TV」（https://sdgs.tv/）を開設・運営しており、「SDGs・TV」は、滋賀県、札幌市、JICA、国内主要NGO、企業など市民組織とパートナーシップを結び、SDGs目標達成のための普及啓発事業を行っています。

先輩を訪ねて
～出会いに感謝～

北海道教育大学岩見沢校
倉　本　格　克　氏
（社会学研究室　昭和６１年卒）

卒業後、採用面接の連絡が入ったのは、確か三月二十八日だった。翌日の面接のため、すぐに釧路に向かった。四月一日に着任するよう言われ、面接直後に岩見沢に戻り、四年間お世話になった方々に別れの挨拶を済ませた。学生気分が抜けぬまま初任の地、音別に到着した。

子供が好きなことだけが取り柄で、とにかく子供と一緒に汗をかいて遊んでばかりいた。授業準備はそっちのけで、放課後は少年団の指導らしきことをしていた。先輩に誘われるがままついて行き、何度もごちそうになった。いい時代だったなあと思う。

当時の教頭先生は、「いいから、遊びなさい。子供と一緒にいることに価値がある。」と、見守ってくれた。二校目は厚岸真龍小に着任。学年経営の大切さや授業づくりの面白さを実感する充実した時期だった。今思うと、音別・厚岸で過ごした九年間と出会った人たちが、私を育ててくれたと感じる。平成七年四月、中富良野町での生活がスタート。田園風景や日々変化する十勝連峰の姿を見ながら、家族四人で豊かで贅沢な時間を共有した。

地域は学びの資源の宝庫。学校と地域の良好な関係が子供たちの成長を支えることを実感した。平成十五年四月、香港日本人学校に派遣になった。感染症対策や命を守ることの重要性、些細な言動が国際問題に発展することを痛感した。日々の日常が危機管理意識を高め、日本を見つめ直す契機となった。香港は家族四人の第二の故郷といえるほど多くの人と巡り会い、視野を広げてくれた。

帰国後は旭川第一小で勤務し、同僚と共に旭川の魅力を教材化した。この頃、青陵会の学習会に誘われ、学校経営の基本を繰り返しご指導いただけたことは、大きな財産になっている。平成二十一年、教頭に昇任。平成二十九年から校長に採用された。

教職三十六年、人に恵まれ、常に支えられている幸せを感じている。青陵の先輩をはじめ、数多くの同僚、偶然出会った人々、今も私を支えてくれている全ての人に感謝したい。

学生活動支援事業

大学連携部長　野田　泰史

大学連携部では、母校の発展や本学学生による芸術やスポーツ活動を通した地域貢献活動を支援するため、平成二十二年度から学生活動支援事業を実施し、今年度で十一年目を迎えます。また、前々年度から幅広い支援を行えるよう一般申請枠を新設しました。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学生活動が制限されており、現時点では本事業も未実施となっておりますので、昨年度の本事業の様子をご紹介させていただき、会員の皆様のご理解と学生活動支援基金へのご寄附をお願いいたします。

〈芸術・スポーツビジネス専攻〉

活動名「北教大岩見沢校ＹＯＳＡＫＯＩ『迅』、来年度の本祭へ向けて」

コロナ禍の影響で演舞を披露することができなかったことから、主に演舞制作などチームの基盤を整えることに力を入れました。来年は本祭及び空知管内のイベントに積極的に参加することで、市民をはじめ多くの方に感動と元気を与えられるようにがんばります。

〈スポーツ文化専攻〉

活動名「ダンス教室の開催」

新体操とチアダンスを組み合わせて踊る「Ｒ．Ｇ．Ｇ．ダンス教室」を開催しました。週一回全四週間にわたって開催し、保護者の方々の前で発表会も実施しました。これからも「新体操の楽しさ・面白さを多くの子どもたちに伝えたい」という目標を達成できるように活動していきたいと思います。

〈美術文化専攻〉

活動名「修了・卒業制作展」

岩見沢会場と札幌会場で展示会を開催しました。幅広い美術活動や学生の姿勢を見ていただくことで、美術の面白さや楽しさ、可能性を感じていただく貴重な機会としました。

〈美術文化専攻〉

活動名「お祭展」

コロナ禍の中、開催できなくなった多くの行事に代わって美術の力で楽しい思い出を届けようと開催しました。縁日のような親しみやすい雰囲気を大切にしたことで若い来場者にも楽しんでもらえました。

以上の活動に約五十万円を支援しました。なお、原資は会員の皆様からいただいた基金への寄附で賄っております。

恩師と学生のこの頃

「更なる活躍を願って」

音楽文化専攻
教授　野呂　佳生

鹿野さんは、二〇一六年に大学院を修了し、六年間野呂研究室に所属していました。高校生から岩見沢校のオープンキャンパスを受講しており、とても長いお付き合いになります。当時からピアノについて高い演奏能力と理解力を持ち、高校生では全国レベルの実力でした。私は二〇〇九年に岩見沢校に異動してきましたので、彼女は私の研究室の二期生です。

一年生では空間を広く感じてスケールの大きな演奏が出来る様に指導しました。彼女の頑張りは素晴らしく短期間で著しく実力をつけ、学内では音楽文化専攻の第一回学内ソロ選抜演奏会に一年の最初の試験で選ばれ、学外ではJPTAピアノオーディションの大学生の部で一年生ながら北海道代表に選ばれるなど輝かしい成績を上げることができました。すべての授業を真剣に取り組み、毎年のように成績優秀者として奨学金をいただいていました。

特に印象に残っているのは、ピアノ指導法でハンディキャップのある児童の担当を行った時、毎週三十分のレッスンのために何日も徹夜で指導案を作成し、生徒さんを飽きさせないように楽しく無駄なく、そして必ず音楽的要素を与えられるような授業を展開しました。最初は手探りでしたが、生徒さんの興味や集中力の持続時間を把握して、適切に時間配分を行い、飽きそうになった時は瞬時に次の活動に入るなど見事な授業を行いました。保護者からも今回の授業で集中力が付きましたと喜んでいただけたことは、鹿野さんにとっても私にとってもうれしい出来事でした。

現在はヤマハでシステム講師をしながら演奏活動も活発に行なっています。音楽関係者から指導者としても高く評価されていますし、彼女の演奏会を聞いて私の恩師故ヤン・ホラーク先生から頂いた音楽がしっかりと伝わっており、さらに成長している姿を見て指導者としての大きな喜びを感じることができました。門下コンパにも積極的に参加し、乗りもよい学生でした。現在もコンパに参加して社会人の立場から後輩達への相談に乗ってくれます。

これからも、北海道教育大学岩見沢校出身の素晴らしい指導者・演奏家として、後輩たちの御手本となる活躍を願っています。

「大切な出会い」

教諭　鹿野真利江

野呂先生には、高校一年のオープンキャンパスでのピアノのレッスンで初めて出会い、その出会いが音楽の道に進むきっかけとなりました。現在は音楽教室の講師六年目となりますが、大学での四年間、そして大学院での二年間が今の私を作ってくれたといっても過言ではありません。

野呂先生はいつも温かく見守ってくださり、大変熱心にご指導してくださいました。研究室以外の学生もレッスンを受けにくるほど、学生たちからも慕われている先生です。当時私は課題をこなすのに精一杯で、空き時間の多くを練習にあてて毎日必死に取り組んでいましたが、野呂先生はいつも良さを引き出し伸ばしてくださるので、毎週のレッスンの時間が楽しみでした。

そんな大学生活の中でも特に印象に残っているのは、野呂先生にもご指導いただいた「ピアノ指導法」という講義でした。市民の方々を生徒さんとし、半年間のレッスンの中で、先生方からのフィードバックをいただきながら指導実習を行うものです。

私が担当したのは障がいをもつ生徒さんで、思うようにいかないことも多く、毎週試行錯誤を重ねてのぞんでいました。しかし、回を重ねるごとに大きな変化を遂げていく様子を見ることができ、先生からの助言や毎回の反省から得たものを活かしていくことで、自分自身の成長をも感じられた貴重な経験となりました。この時の経験が今の仕事に直結して活きていて、ただ「ピアノを教える」のではなく、「ピアノを通して心から音楽を楽しんでもらう」ことの大切さや音楽を学ぶことの本質にも気付かされました。

昨今の大変な状況の中で、音楽の大切さや音楽のもつ力の大きさを改めて感じている方は多いと思います。生の音楽に日常から触れる機会や、その空間でしか味わえない体験や経験というのは、心を豊かにするかけがえのない時間だと感じています。野呂先生が私自身の世界観を広げてくださったように、音楽を通して創造性や表現力を育み、心を育てることのできる指導者を目指していきたいです。今の時代を生き抜く子どもたちの未来の可能性を広げることのできるよう、自分自身も日々の学びと努力を惜しまず励んでいきたいと思います。

新青陵会員の抱負

社会人としての目標

岩見沢市廃棄物対策係
手嶋勇斗

三月に北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツビジネス専攻を卒業し、四月から岩見沢市役所に就職しました。

私は現在、岩見沢市市民環境部廃棄物対策課廃棄物対策係に所属しており、ごみの減量化に関わる事務を担当しています。その名の通り、家庭から出されるごみに関する業務です。廃棄物対策課は、施設の管理維持・助成業務・契約業務・窓口業務等、担当する範囲が多くあります。

最初の二ヶ月間は毎日がメモをすることで必死でしたが、現在は慣れてきつつあります。ごみの減量化を担う責任の大きさも徐々に理解しました。業務をする上で、毎日のようにごみステーションが汚いという相談が寄せられて来ます。「出されるごみには排出者の心が現れる」という考えが自分の核になる言葉になりました。

部屋を例にすると、「自分の部屋は汚いが共同空間は綺麗にしたい人」、反対に「共同空間は粗末だが、自分の部屋は綺麗にしたい人」というように考え方は十人十色ではないでしょうか。多種多様な価値観が存在する現代でごみの分別を守ってもらえること自体が難しい事だとも思ってしまいます。しかし、一人一人が他人への思いやりがあれば不適切な出し方は無くなるはずだと信じています。分別に協力してくださる方々の為にも分かりやすく協力したくなる啓発活動をするのが自分の役目です。

いつか岩見沢市から不適切なごみが無くなる日がくるように業務に努めます。新入職員でできる業務は先輩方に比べるとまだまだ少ないですが、対応した市民の方が喜ぶ顔を見るだけでも自信につながっています。いずれは、窓口に来られる市民の方に安心を提供できるようになりたいです。

青陵会の会員になり大学の先輩・同級生・後輩と、互いにいろんな話をできることを楽しみにしています。北海道教育大学岩見沢校で学んだことや思い出を糧に、社会人として社会に貢献できるように頑張ります。

やりたいことは諦めない

三笠市地域おこし協力隊
安ヶ平　萌　子

私は一昨年に北海道教育大学岩見沢校スポーツ文化専攻を卒業、今年の三月に北海道教育大学大学院教科教育専攻保健体育専修を終了し、四月から三笠市の地域おこし協力隊地域福祉部門として三笠市ふれあい健康センターで勤務しております。

大学から大学院まで、教員とスポーツ科学の勉強を専門的に続けていた私が、「地域おこし協力隊」という道を選択した理由は、自分が今も打ち込んでいる山岳スポーツ「スカイランニング」にあります。スカイランニングとは山を駆け上り、山頂まで、または山頂を通過し下山まで等のタイムを競うスポーツです。私は大学三年次の時このスポーツに出会いました。

この競技を行う舞台である山では様々な人との出会いがあります。中でも多いのは、仲間と楽しそうに生き生きと登る高齢者の方々との出会いです。今までスポーツを現役世代の「選手」の中でしか行ってこなかった私にとっては、これがすごく新鮮なものであり、同じフィールドでそのような方たちを見て、身体を動かすことを長く楽しめることが人生においてすごく重要なことだと思いました。このことから私は運動によって健康な生活を支える健康運動指導士の資格を大学院在学中に取得し、それに関した仕事がしたいと思うようになりました。しかし、そこで競技をやめる選択肢はなく、協議に関連した自分の持つ知識やスキルを活かして新しいことを始めてみたいという願望もあり、なかなか進む道を決められずにいました。そこで見つけたのが地域おこし協力隊という働き方でした。特に三笠市の地域おこし協力隊には保健福祉部門があり、健康運動指導士としての資質を生かせることに加え、三笠市自体が自分の大好きな山に囲まれた自然豊富な環境であることから、「ここしかない」と一般企業や教職の道はそこから一切考えず、三笠市の地域おこし協力隊に志願しました。

普段の業務内容は、高齢者の方々が集まる市内の市民センターを周り、一緒に体操をしたり、脳トレをしたりしています。その傍らで、自分のやりたいことの一つであった自然環境を利用したアウトドアアクティビティやイベントの考案等をしています。コロナの影響もあり、運動教室やイベント等全てが実現できていない状況ですが、毎日高齢者の方々の元気な姿を見ることで私も元気づけられています。三年間という決められた任期の中で、どれだけやれるか、挑戦ばかりの日々になると思いますが、自分だからこそできることを一生懸命に頑張り、三笠市の今まで見えなかった魅力をより多くの人に発信していきたいと思います。

支部だより

「すべては子どものために」

十勝帯広支部 支部長
大熊孝史
（中札内村立中札内小学校）

○　はじめに

教育界には、良くも悪くも、新年度になったらすべてがリセットされるという感覚が何となくあったかと思います。しかし、新型コロナウイルス感染症は現在、収束するどころか第四波が訪れ、願いは見事に裏切られました。若者や子どもにも強い感染力をもつ変異型のウイルスも広がっており、恐らく、あと数年は現在の様な状況が続くと覚悟しなければならないのかなと思うところです。

そのため、令和三年度も十勝帯広支部定期総会、懇親会の開催は、やむを得ず中止とし総会議案については、会員に書面にて審議、承認を受けました。

学校も家庭も、教師も子どもも保護者も、誰一人、得をしている人はいません。だからこそ、通常の学校生活に戻るまでの間、「すべては子どもたちのために」できることを工夫しながら一つでも多くの活動をしていきたいと考えています。

岩見沢校は平成十八年度の学部課程の見直しにより教員養成課程がなくなり新たな会員の加入が減少しています。青陵会十勝支部と帯広支部は平成二十八年度に合併して青陵会十勝帯広支部とし、活動の一層の充実を図っています。

職種、学校種や規模の大小、立場の違いなどありますが、同じ学校を卒業した者同士、「同窓の好」で交流をすることを通して、仲間意識をもち、時として研修で高め合い、時として悩みを話し合い、同窓の仲間として、現役会員七十九名、ＯＢ会員三十二名で会員の絆を深めていきたいと思います。

○　活動の重点

・会員相互の研修の充実と情報交流
・青年会員、中堅会員などの組織化

○　今年度の活動の紹介

五　月　総会・役員会（書面会議）
七　月　十勝帯広青陵会研修会
　　会報「きずな」発行
一　月　新年交礼会
二　月　会報「きずな」発行

〈十勝帯広青陵会研修会〉

本部理事長（岩見沢市立岩見沢小学校長）藤田祐二氏を講師に、今日的な教育課題、「全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現」に向けて、ご講話をいただきました。今後は会員に広く積極的な声掛けをして、ニーズに合わせた研修会を行っていきたいと考えています。

〈会報「きずな」の発行〉

会長・副会長の「巻頭言」、「各部の活動計画・報告」、「会員の声」などの内容で、年二回発行しています。

○　活躍する同窓生の紹介

（七月発行　きずな第一二六号掲載）

幕別町立白人小学校勤務の太田越雄三教諭は「教員長期社会体験研修」制度を活用して、教員としての視野を広げる目的で一年間、アウトドア観光を推進する「デスティネーション十勝」に派遣されています。

教育活動を民間がコーディネートすることで、質の高い教育を提供できるメリットを活用し、地元のよさの再発見、地域の活性化にもつながる「教育」と「野遊び」を融合する「授業プログラム」の作成に尽力しています。

○　おわりに

新型コロナウイルス感染症の影響で、交流の場の設定は難しいとは思いますが、今後も、「会員相互の親睦と資質の向上」を基本とし、活動を充実させていきたいと考えています。また、本部との連携を深めるとともに全道各支部との情報交流に努めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

会報一〇八号をお届けいたします。発行が例年より一ケ月ほど遅れてしまい申し訳ございません。このような情勢の中、玉稿をお寄せくださった皆様に心よりお礼を申し上げます。

《広報・情報発信担当》

・部長　新保秀樹（栗山町継立小学校）
・副部長　林宏和（岩見沢市豊中学校）
　　渋谷憲一（妹背牛小学校）
・部員　一ノ瀬健太郎（岩見沢市東小学校）
　　小野寺英樹（深川中学校）
　　沢泰宏（岩見沢第一小学校）
　　鈴木輝光（千歳市第二小学校）